

説教『わたしの力の神よ』

小河信一 牧師

詩編22編 1節～32節

本日は、詩編 22 を通して、イエス・キリストの出来事を「思い起こす」大切さを学びたいと願います。

日々、詩編を読んで、福音を思い起こし、確かめます。

私たちが福音を正しく、そしていよいよ深く受け止めるように、それを「思い起こさせる」のは、第一に聖霊の働きです(ヨハネ 14:26)。その聖霊の導きの中で、「私」は、ひとり神の御前に立つかのごとく、主体的に、イエス・キリストの出来事を思い起こします。

考えてみれば、「思い起こす」というのは、神が人に与えてくださった最高の賜物の一つとさえ言えましょう。例えば、歴史や科学の分野において、ある事件や実験(の失敗)を想起し、その想起を積み重ねていくことこそが、新しい知見や発見へとつながります。信仰者として私たちはこれから、一週間の生活の流れの中で、主の日に与えられたキリストの恵みを、後の日々を通じて思い起こし、新鮮な力を注がれて生きていくのです。

いつも、つまり、礼拝のみならず日常生活においても常に揺るがぬ信仰は、〈直接的に〉信仰告白を唱え、また、〈間接的に〉詩編などによって福音を呼び覚まされることによって、よりいっそう固められていくのではないのでしょうか。〈ほのめかしつつ生き生きと〉福音を伝達している詩編は、日本人の繊細な感性と自然豊かな土壌に合った、格好の伝道文書といえるかもしれません。

「思い起こす」という観点から、詩編 22 は、私たちの魂に、イエス・キリストの十字架を呼び覚ます詩句の宝庫です。詩編 22 全体の骨格からその細部にわたり、主の十字架がまさに私たちの目の前に、はっきり描き出されます(ガラテヤ 3:1)。私が「虫けら」または「人間の屑」と自覚する(詩編 22:7)ほどに貧しく(同上:25,27)、へりくだることによって、暗黒の中に、主の十字架は輝きを放ちます。

単に自説ですが、イエス・キリストの十字架の記事を想起させる点において詩編 22 で顕著な箇所は、:2,8,9,16,19,32、以上、6節です。

〈参照〉

以下の説教中で言及しない詩編 22:8,9,16 について

詩編 22:8→ルカ 23:35、マルコ 15:29

人が「あざ笑い」「頭を振る」。

詩編 22:9→マルコ 15:30

主イエスは自分を救うことについては無力であり続けられ、人々の嘲りを身に引き受けられた。

詩編 22:16→ヨハネ 19:28

主イエスは死の脅威に晒される中、極限の「^{さら}渴き」を体験された。

詩編 22 の詩人は、油注がれた預言者のごとく、神の深遠な計画を書き連ねました。それは、「主イエスの十字架の出来事は、聖書の言葉が一つ一つ実現するためであった」(熊澤義宣)ということを実証しています。

主イエスが「わたしの神よ、わたしの神よ」(エリー、エリー / エロイ、エロイ マルコ 15:34)と叫ばれたその「わたしの神」に関わるのですが、最初に、詩編 22 の表題、「^{あかつき} 暁の雌鹿」に合わせて、について説明します。

「暁の雌鹿」に合わせてということは、つまり、この詩編をその指示に従って、歌う、あるいは朗誦することを表しています。それがどんな調べであったのかは、もはや分かりません。ただし、アヤラー「雌鹿」が、同じ詩編の20にあるエヤルティ「わたしの力の神よ」(旧約でこのみ)と響き合っている(ヘブライ語の両語は三つの根字が同じ)ことは見逃せません。

雌鹿の鳴き声がどのようなものであれ、詩人はそこに、「静かにささやく声」(列王記上 19:12)のごとくに、まことの神の力が込められていることを聴き取っていたのでしょう。私たちは、無二の表題を看過しないで、「暁の雌鹿」の調べを基調音として、夜明け前の暗黒から輝かしい朝へ貫かれている神の力を汲み取りましょう。

それでは、詩編 22 の中から、イエス・キリストの十字架の出来事を「思い起こさせる」詩句を取り上げましょう。

詩編 22:19——

わたしの着物を分け

衣を取ろうとしてくじを引く。

一頭の獅子(詩編 22:14 他に詩編 7:3)が襲って獲た餌食を、獅子の家族や仲間に分け合うように、^{ふんどりもの}「分捕物」が処分されます。主イエスの十字架の真下で、そのように卑劣な行為が、ローマの兵士たちによって行われました。

ヨハネ福音書 19:23-24——

23 兵士たちは、イエスを十字架につけてから、その服を取り、四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。下着も取ってみたが、それには縫い目がなく、上から下まで一枚織りであった。24 そこで、「これは裂かないで、だれのものになるか、くじ引きで決めよう」と話し合った。それは、
「彼らはわたしの服を分け合い、
わたしの衣服のことでくじを引いた」
という聖書の言葉が実現するためであった。兵士たちはこのとおりにしたのである。

エルサレム・旧市街、ゴルゴタの丘へ向かうヴィア・ドロローサ(悲しみの道)沿いにエック・ホモ教会があります。十字架の出来事の際のものであるというのは、あくまでも伝承ですが、この教会の石の床には、ローマ兵が刻んだといわれるゲームの跡が残っています。眺めていると、ついつい自分でもサイコロかオハジキなどで遊んでみたくなります。

このように詩編と福音書に描かれているくじ引きは、一種の賭け事であり、真剣さを欠いた戯れです。カルヴァンは、その人々の卑劣さについて「その敵が分捕物として、これを彼らの間で分配し、彼(詩人)を笑いものにする、と(詩人は)嘆いているのである。このことは、彼らの邪悪さを増大することになる」と見抜いています。

そこに露わにされているのは、神の救いの御業を前にしながらも、それを仰ぐことなく、無関心であり続け、罪の坂を駆け下っている罪人の姿です。彼らは、つかの間の^{たの}愉しみのうちに、自分たちが神に反逆していることすら、気が付いていないのかもしれませんが。

この「くじ引き」の出来事は、福音の初めから終わりへと至る途上の場面に相当します。いわば、彼らの高慢さを鏡として、私たちは聖霊の働きによって悔い改めへと導かれます。十字架の真下で、十字架による救いの知らせを「思い起こしていない」人々の姿を、私たちは「思い起こす」のです。それによって、私たちは正しい福音の道に立ち帰ります。

次に、イエス・キリストの十字架の出来事を「思い起こさせる」詩句として、詩編 22 の枠組を成している:2と:32 を取り上げましょう。そして、主イエスの叫び、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」を元となっている詩編の詩句に即して、十字架上の言葉の真意を捉えることにしましょう。

詩編 22:2——

わたしの神よ、わたしの神よ
なぜわたしをお見捨てになるのか。
なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず

呻きも言葉も聞いてくださらないのか。

先に説明した通り、「わたしの神よ」は、詩編 22:20 に再起している「わたしの力の神よ」に他なりません。主イエスは、御子を見捨てられる父なる神の「無力」ではなく、見捨てられる中になお働き続ける父なる神の「力」への信頼の中で、「わたしの神よ」と叫ばれたのです。

本来、夜明けどき、「なぜわたしをお見捨てになるのか」と叫ばなければならないのは、ペトロのような罪人です。ペトロは、神の力を信じきれずに、この世の力の方へなびいていってしまいました。

今、私たちは自分自身が「なぜわたしをお見捨てになるのか」という問いの下に立つかどうかが問われています。

主を裏切ってしまったペトロの側から言えば、神は私を見捨てられたに違いないと判断しているのかもしれませんが、しかし、「なぜわたしをお見捨てになるのか」は、まだ閉じられていない問いかけであり、実際に、主イエスがその問いを父なる神に問いかけられました。

人間は神から見捨てられたという恐れを抱いているかもしれませんが、キリストは父なる神を「わたしの神」と呼んでおられます。御子、イエスは「まことの人」として、「なぜわたしをお見捨てになるのか」という問いがもたらす悩みを、また罪と向き合わざるを得ない苦しみを、身をもって引き受けてくださっています。

十字架上の「お見捨てになるのか」という主イエスの叫びは一言ですが、詩編 22 では、それが同類の嘆きである「なぜ(神は)わたしを遠く離れられたのか」(:2 後半,12,20)や「(神は)答えてくださらない」(:3)という言葉によって繰り返されています。それは、主イエスが上げられた叫びは、本来、私たちのものであり、神に向かって叫び続けられなかった弱い私たちが、今、その御子の叫びのもとに集められるべきことを、私たちに訴えています。詩人が反芻した神への問いかけを通して、午後三時の暗闇を切り裂くようにして上げられた主イエスの叫びに、心から集中しましょう。

「^{あかつき} 暁の雌鹿」に合わせて歌われる詩編は、夜明け前、最も闇が深くなった後、新しい朝が到来することを預言してします。そのことは実際に、主イエスの弟子、ペトロの生涯のクライマックスを見渡せば分かります。

雌鹿ならぬ鶏が鳴いた絶望的な夜明けを経験したペトロの上に、「わたしの力の神」が働いて、神によって一方的に、神の義と愛が現されました。主イエス・キリストが人々の敵対心、無関心、そして裏切りなど、いっさいの罪を担われて、十字架につけられて死に、そして三日後に、よみがえさせられました。人間の罪深い闇のただ中に、神の栄光が輝いたのです。

ペトロは幸いにも、エルサレムの夕べに(ヨハネ 20:19)、そして、ガリラヤ湖畔の朝に、よみがえりの主が共におられる時を過ごしました。ペトロはガリラヤ湖畔で、「さあ、来て、朝の食事をしなさい」(ヨハネ 21:12)と言われる主イエスと出会いました。そうして、彼は、自らの弱さや罪をさらけ出し、イエスを救い主と信じる信仰を受け入れました。

毎朝、鶏の鳴き声を聞いたたびに、ペトロは、自分が神を見捨てたことではなく、むしろ、神が自分を見捨てなかったことを思い起こし、感謝したのではないのでしょうか。

ペトロは、自分では見出せなかった、罪の奴隷状態から解放される出口が、上よりの力によって開示されました。その上、聖霊降臨の出来事を通して、兄弟姉妹の交わりにおいて、すなわち、教会の中で、主の十字架を思い起こすよう、聖霊の助けが与えられました。

最後に、ペトロにおいて、また私たち一人ひとりにおいて、「成し遂げられた」神の御業を、信仰により確認しましょう。

詩編 22:32——

成し遂げてくださった恵みの御業を
民の末に告げ知らせるでしょう。

ヨハネ福音書 19:30 十字架上の主イエスの言葉——

「成し遂げられた。」

私たちは、「わたしの神よ」と、もう呼べないほどの信仰の衰弱、生きていても死んでいるかのような霊的な死、そして、肉体の死の恐怖などに取り囲まれています。

詩編 22 の詩人は私たちに、「なぜわたしをお見捨てになるのか」という叫びにおいて、自分の苦悩や弱さ、不信仰、そして自分の罪をあからさまにすることを教えました。その問いを問い続けることがまた、神の御前における悔い改めへ(詩編 22:28,30)とつながっています。

主イエス・キリストの「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか」という真実なる叫びに比べれば、私たちの「わたしの神よ」という叫びも祈りも中途半端かもしれません。具体的に言えば、私たちの「わたしの神よ」との祈りが、「万事が益となるように共に働く」(ローマ 8:28)という平安なる思いへと必ずしも到達していないことを顧みれば分かるでしょう。しかし、そのような弱い私たちに代わって、主イエス・キリストが、また、そのとりなし手である聖霊なる神がうめくように「わたしの神よ、わたしの神よ」と叫び続けておられます。

では、詩編 22 の終わりが「主は成し遂げた」であり、また、十字架上で死なれた主の言葉の終わりが「成し遂げられた」であることは、何を物語っているのでしょうか？

主イエス・キリストの福音によれば、それは、死からの復活が成し遂げられた、ということです。

これから肉体の死に向かう者も、永遠の命によってその人生は「成し遂げられています」。神の国をめざしながらも、時に^{うよきよくせつ}紆余曲折する教会の歩みも、「神の国は近づいた」(マルコ 1:14)と宣言された主イエス・キリストの復活によって「成し遂げられています」。

人が罪の苦悩とその泣き叫びから、無償で救い出されて、永遠の命へと至らしめられることは、ただ主イエス・キリストへの信仰に^よ拠ります。

カール・バルトは、詩編 22 の最初と最後の句を想起させながら、主イエス・キリストとは、どんなお方であるか、説き明かしています。

神に見捨てられた状態のイエスのこの姿は、われわれに何を語っているのか。

もう一度、ゲツセマネに戻ってみよう。

ここで、「なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ 15:34)と溜め息をついた方は、——「わたしが願うことではなく、御心に^た適うことが行われます(=御心が成し遂げられます)ように」(マルコ 14:36)と祈った人と同一である。

イエスが、今や、生きた神の言葉が朽ち果てたと考えたときに、イエスは、神の言葉を彼の十字架を通して最も力強い仕方で説教したのである。

友人のみなさん。われわれはこの力によって、心を動かされようとはしないのか。

暁の雌鹿の詩編の中心、「わたしの力の神よ」(詩編 22:20)——

信仰の中心は、エヤルティ「わたしの力の神よ」、すなわち、エリー / エロイ「わたしの神よ」にあります。

さあ、主イエスと共に、また詩編詩人やペトロと共に、そして雌鹿の調べに合わせて、「わたしの力の神よ」と叫び、祈りましょう。

この一句に、新しい朝、すなわち、神の国の朝を待望することのすべてが込められています。主にあって、「わたしの力の神よ」との叫びを、私の祈りとする信仰に生かされ続けますようにと願います。